

あい  
〜と☆

# 死神らいふ!



試し読み版

倉田ジジジ  
表紙イラスト: ひなぐま

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『すい〜と☆死神らいふ!』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



あい  
〜と☆

# 死神らいふ!

倉田シンジ  
表紙 / ひなくま

## 登場人物紹介

---

### Characters

こもち

#### 小桃

関東地方を担当する駆け出しのおっとり死神ちゃん。魂を狙われた三郎を守るために付きっきりの毎日。

#### ローズマリー

魔族上司の命令で三郎の魂を持ってくるように言われた悪魔のお姉さん。エッチな技を駆使して三郎の魂を奪おうとしてくる。

かわさきさぶろう

#### 川崎三郎

しばらく死ぬ予定はないのに、運悪く魔族に魂を狙われることになった少年。

都会というには程遠く、田舎というほどのド田舎でもないこの町で、二丁目に住む川崎家の三郎くんといえは近所のおばさんによる井戸端会議ではちよつとした有名人だ。

「ねえ、聞いた？ 二丁目の川崎さんちの話……」

「ああ、そうそう、最近気になるわよね……?」

今日も今日とて、午後の買い出しに出かけた主婦同士でそんな会話が交わされている。

——川崎家の一人息子である三郎くんは、両親が共働りで、朝早く出かけ夜遅く帰るせいでいつも一人きり。近所のみんなで気にかけてあげましょう——。

なんていう話かと思うとそうでもない。

そもそも、もう大人とはいわないまでも、子供だからと心配される歳でもない。来年には受験を控えた学生である。

おばさんいわく「まだ学生なのに、礼儀がきちんとしていていい子なのよね」。

いわく「この間は学校の模試で一番だったらしいわよ」。

いわく「それにあの子かわいらしくて、母性本能をくすぐられるっていうか……」。

このように、噂話の内容は妙な私情を挟みつつもおおむね好評だ。

一人息子としては寂しい家庭環境なはずなのに、幸いにもそれが思春期時代の三郎に影響を及ぼすことはなかった。性格がねじ曲がったり拗ねて家を飛び出すようなこともなく、むしろ、なんでも一人でこなす優等生に育っている。おまけにその歳の男の子にしては背

が小さめで、しかも顔立ちはパツと見て女の子のようにかわいらしくて。

ようするに、ご近所のちよつとしたアイドルだ。

普通そういう話題はご近所で一番よくできた幼い子供——具体的には小中学生くらいまでが噂話の主役になるはずだが、ここ数年は三郎が不動の地位を築き上げている。本人の意思とは関係ないところで、だが。

そんなわけでまだ隣近所のお付きあいの残るこの町、川崎家の近所では、それらの話題がおばさん達の無責任な噂話に上ることも多い。

それに微妙な変化があつたのは、もう一ヶ月ほど前のことになる。

「で、どうなの？ あの子、三郎くんの彼女なのかしら？」

「それがね、よく分からないのよね。一緒に住んでるのは確からしいけど」

そう言ったおばさんが首をひねる。

「あの子、かわいいけど……変わった子よねえ」

議題は「あの子」の話に移っていく。数人に増えたおばさん達が一様に頷いていた。

「変わってるわねえ……。でも一緒に住んでるってことは、やっぱり彼女じゃないの？」

「それが川崎さんちの奥さんの話だとそうでもないらしいのよ」

「あらあなた、奥さんに直接聞いたの!? で、なんて？」

「いえね、いちおう居候させてあげてるってことらしいんだけど……要領を得なくて」

川崎家の奥さん、つまり三郎の母親から直接聞いても分からないらしい。

「なににせよ、ちよつと心配よねえ……」

「心配っていうか、すぐく興味が湧いちやうわよねえ……」

結局、おばさん達は全員でしばらくしきりに頷いて、その日の井戸端会議は解散となった。

※

両親は一人息子よりも早く出かけるので、三郎の朝食は作り置きが当たり前だった。それがここ一ヶ月というもの、朝になると台所には香ばしい匂いが漂う。

「むむ、今日はかなり上手に焼きましたです……!」

ガスコンロに向かつていた、エプロン姿の女の子が独り言を呟く。

ぎゅつと握った手にはフライパン。その中にはこんがり焼けた目玉焼き。

「昨日の教訓を生かして、フライパンに油を引いたのが勝利のカギなのです……!」

満足げに独り言を続ける少女の姿は、なんとも奇妙なものだった。

腰下には申し訳程度のエプロンを着けてはいるものの、生地の厚いローブの上に着けているせいで超絶に似合わない。

そのローブは貫頭衣タイプ。簡単に言ってしまうえばフードつきの膝丈ワンピースなのに、そういった一般的な服とは圧倒的に違って見える。ビロードのような重厚な生地と装飾、真っ黒な色もたらず印象のせいだ。

しかも家の中なのにフードをすっぱり頭にかぶっていて、今は、満足げに微笑んでいる口元しか見ることができない。かろうじて女の子と分かるのは、すっぱり着込んだローブの胸が控えめに盛り上がっているおかげだった。

「くふふふ……今日こそは三郎さんに『小桃こももの作った卵焼きはおいしいね』と言わせてみせるのですよ……」

独り言に含み笑いのようなニュアンスを混ぜて、小桃という名の少女はフライ返しで目玉焼きを持ち上げる。そおつと運んで皿の上へ。

蓋をして蒸らさなかつたせいで黄身の部分はほとんどナマ、皿へ下ろす時にぷちゅつと潰れたが気にしない。

握っているのがフライパンでさえなければ、魔女が秘薬でも作っているのではないかという風景だが……それは当たっているようで当たっていない。

なにしろ彼女は、死神だった。

「ああ……、生命の根源たる卵を料理に使うなんて、人間は罪深い生き物なのです。でも、これは生きていく上で必要な行為……いわば魂のリサイクルなのです」

無精卵が生命の根源と言えるかどうかはともかく、つまり、人間の魂を狩り集めるのが——自称、死神ちゃんである小桃の仕事である。

彼女は今、とある事情で川崎家に居候していた。



皿の脇にコシヨウを置き、ご飯が炊きあがっているのを確かめるとお碗を準備。さつき温めておいた作り置き味噌汁も確認して、甲斐甲斐しくも準備万端。キッチンに置かれた三人家族用のテーブルに急遽こしらえた自分の席へと、ちよこんと座って……。

「つて……あれれ？」

そこで何気なく壁時計に目を向け、彼女は首を傾げる。

「三郎さん、いつもはもう起きてきている時間なのに、今日は遅いのですよ……？」

平日の彼の起床時間は誤差五分以内が普通のはずだ。

せつかく三郎のために料理したのに、冷めてしまつてはもつたいたい。

「むうう、早くしないと小桃の傑作料理が台なしなのです……」

それでも、三郎のことだからすぐに来るだろう。そう思つてジリジリしながら待つ。

時計を見て、自分の作つた卵焼きを見て、また時計を見て。三十秒ほどで限界を迎えた。

「ああもうっ！」

小桃は傍らに手を伸ばすと、そこに置いてあつた大きな鎌を手に取つた。

彼女の背丈は一五〇センチそこそこ。それより三〇センチは長い、いかにも重そうな大鎌を片手で軽々と持ち上げる。ちなみに、先日、鎌を持ったまま出かけて銃刀法違反で捕まりそうになつたので、刃はついていない予備の鎌だつたりする。

「まったく……今日の三郎さんはボンクラなのです！ ダメダメなのです！」

せいぜい五、六分起床が遅れただけで酷い言われようだ。

小桃は憤懣ふんまんやるかたなしとばかりに鎌を床に突いて立ち上がると、ずつとかぶりっぱなしだったフードに手をかけ、それを脱ぐ。

流れた黒髪の艶めいた輝きは、肩まで緩やかに続いていた。年齢は……人間で言えば十代の中盤に見えるが、もつと幼くも見える。

「文句のひとつも言つて、叩き起こしてやるのです！」

現れた瞳は大きくつぶらで、ぷりぷり怒っているせいだろうか、独り言と表情の変化に合わせてくりくりとよく動いている。独特な口調も相まって妙にかわいらしい。

背丈や体つきのわりにちよつと幼く見えるのはそのせいだが、よく見ると鼻筋も眉もすつと通つた美形。見る者におつとりして優しい印象を持たせる垂れがちの目尻は怒つてわずかに吊り上がっているのに、子供が拗ねているだけにも見える。

死神——彼女に言わせれば「死神ちゃん」だが、小桃という名の少女は死神という言葉の持つ意味とは大きくかけ離れた、かわいらしい普通の女の子にしか見えない。……服装は確かに変わっているし、大きな鎌は例外だが。

しかしそれでも小桃は、日本の関東地区担当の魂回収人——つまりは死んだ人間の魂を回収する役目を持った、れっきとした死神だった。

※

一方そのころ——正確には小桃が台所でふりふりし始める少し前のこと。

川崎家長男であり一人息子の三郎は、自室のベッドに寝たまま固まっていた。

(なんだこれ……ううう、身体が動かないよ……)

文字通り、身体が固まっている。

ピンと跳ねた寝癖を頭のでっぺんにつけた三郎は、確かに近所のおばさんが言うように母性本能をくすぐるタイプだった。背は小桃と同じかちよつと低いくらい。今は金縛りに直面して、精悍せいこんというには程遠い大きな目を泣きそうにうるうるさせている。

いや、金縛りで動かしづらいつか、そんななまっちよろい意味ではない。目が覚めた途端に、頭から指先まで、指先ひとつ動かせない状態だった。

よく見ると自分になにかがのしかかっている。身体にかぶせた布団の中で、もぞもぞと蠢うごめくモノがある。三郎の下半身の、ちようど大事な場所があるあたりで。

(こ、これって、まさか……)

優等生のイメージにはしっくりこない、妙にかわいらしい顔が「ううう」と情けない呻きを上げたところで、その「まさか」が布団をめぐって顔を出した。

「あら、さぶろー、もう起きたの？ ちよつと動けなくさせてもらってるわよ」

まるでお隣さんの挨拶のように気楽なことを言っつて布団の中から現れたのは、シャープな輪郭が印象的なお姉さんだった。

気の強そうな印象の切れ長な目に、ふっくらつやつやした赤い唇。ウェーブがかかった黒髪は赤みがかかった輝きを持って、光によつて深い黒に見えたり紫っぽく見えたり。背中の方まで続くかなりのロングヘアだった。外見はせいぜい二十歳かそこらに見えるのに、雰囲気はもつと成熟したモノを持っている、不思議な女性だ。

「うううう……ロ、ローズマリーさん……」

三郎が呟くと、その女性は端整な顔に邪悪な微笑みを浮かべた。

「アタシに『さん』づけなんて、相変わらず律儀ね。仕方ないから、それに免じてすぐ終わらせてあげるわよ」

さらに布団がめくられて、三郎の下半身に添い寝していたお姉さんが全身を現す。死神ちゃんの小桃とはまた違った、独特な衣装を纏まとっていた。

衣装——というか、まるで水着のように肌に密着し、露出している服だ。

赤っぽい布地は、今にもこぼれそうな乳房と恥ずかしくて見ていられないほどの食い込みを見せる股間をやつとのことで覆い隠しているだけだし、その上に羽織つてきゅつと革紐で締めつけられている短いジャケットは……なんというか、その白く抜けるような肌を隠すというよりも、わざと肌の美しさを際立たせるためとしか思えない。

「な、なんで……あなたがここに……ううう」

「なんでって……前にも言ったでしょ。アンタの魂を貰いに来たに決まってるじゃない」

言いながらすつと動かし手の先で、身動きできない三郎のアソコが撫でられる。

「や、やめて……」

やつとのもので動かし首を左右に振り、途切れ途切れに呻きを漏らす三郎。身体は動かないのに感覚だけは如実に伝わってきて、少年はぞくぞくと背筋を震わせてしまった。「んふふふ。朝から元氣ねえ……ってどうか、朝だから元氣なんだっけ？」

いつの間にか寝間着を脱がされトランクス一丁になった少年のソコは、いわゆる朝立ち状態。ニヤニヤ笑いのローズマリーの八重歯が、よこしまな光をきらりと輝かせる。

その途端、彼女の長い髪が流れ、頭の両脇についた小さなツノが目に入ってきた。形はヤギのツノのように小さなカーブを描いて上に伸びたモノ、だが、大きさはきわめて小さい。それが作り物の類でないことを、三郎はすでに知っている。

(ほ、ほんとに、魂を……取る気なんだ……)

このローズマリーという女性……いわゆる悪魔である。

彼女と初めて会ったのは一ヶ月くらい前のこと。突然三郎の前に現れたローズマリーは、さつきと同じように「魂をいただく」宣言をして少年へと襲いかかってきた。

そこに颯爽と現れて三郎を助けてくれたのが死神の小桃である。

なぜ普通の人間である三郎が悪魔に魂を狙われるのか……あとで小桃に聞いた話によれば、どうやら魂というものには血液型のように何種類かの型があるらしく、三郎のそれは

かなり珍しいタイプなのだそうだ。

魔界では人間の魂は嗜好品として重宝されているらしく、悪魔はそれ目当てでちよくちよく人間界に来ているらしい。そして、魂を取り扱う魔族会社の上司にあたる悪魔から三郎の魂を抜き取ってくることを命じられたのが、このローズマリーという悪魔だったというわけだ。

一方の死神ちゃん——小桃の一族は、寿命を迎えた人間の魂を回収し、それをリサイクルして人間界に還元するのを生業としている。なので、まだ寿命を迎えていない人間から無理やり魂を奪う魔族とは仲が悪い。

魂を嗜好品として浪費する魔族と、魂をエコに活用する死神族の争いに巻き込まれた——というのが、ようするに今の三郎の状況である。

魂を奪いに来るローズマリーと、それを防がんとする小桃。標的である魂の持ち主である三郎がどちらを頼るかといえば、それはもちろん死神ちゃんなわけだ。

そんなわけで、小桃には一ヶ月前からこの家に同居してもらい、ボディガードをお願いすることになったのだが……。

「じゃあ、すぐ終わるからジツとしてなさいよね。大丈夫よ、痛くないから」

ローズマリーが顔を俯けた。まっすぐ仰向けに硬直している三郎の足に跨がり、股間に顔を顔を近づけていく。

(ううう、小桃ちゃん、たすけてよお……)

肝心な時に頼りの死神ちゃんは来てくれない。

パンツの端にかけられた指が、ずりずりとそれを引きずり下ろしていく……。

「痛いっていうか、むしろ気持ちいいでしょう？ アタシにこんなコトしてもらえて、しかも魂を貰ってもらえるんだから、これはむしろ光栄なことよね？」

「け……けっこうです……」

「なによ、アタシがこんなに頼んでるんだから魂くらいケケケチしないでドーンと差し出しなさいよ！ 男の子でしょ、アンタ」

「……た、頼んでないし……」

一方的な要求を突きつけながらトランクスを下ろしていくローズマリーは、ちよこんと顔を出した三郎のアレに目を吸い寄せられている。

「あら……顔に似合わずこっちはちゃんと成長してるじゃない。そういえば、アンタのコをちゃんと見るのは初めてだったわねえ……とつてもおいしそう」

悪魔が魂を奪うために、対象となる人間を殺したりすることはほとんどない。結果的には魂を奪って命を奪うことに変わりはないものの、その過程は重要らしく、魂を傷つけず奪うためにこうやってエッチなこと骨抜きにして吸い取る、というのが常套手段だ。

三郎に対しても同様。一ヶ月前から何度も、少年の魂を狙うローズマリーはあれやこれ

やの手を尽くしてきた。これまではそのたびに死神ちゃんが助けにくれたのだが、今回はかなりのピンチだ。

「んふふ、朝早く出張ってきた甲斐があったわね。あの邪魔な死神の小娘も、まさか悪魔が朝から夜這いとは思いませんでしょう……」

自分の計画に興奮しているのか、にやあ、とほくそ笑むお姉さんはうつとり頬を染めている。だが、それ以上に顔を真っ赤にしているのが三郎だ。ただでさえ朝立ちしているのに、それに加えて下着を脱がされる刺激やら見られる緊張やらで、トランクスから先端を覗かせるペニスはパンパンに張りつめた亀頭が包皮からほとんど顔を出しつつある。

「あ、あの……ローズマリーさん、やめて……」

優等生の少年が上目遣いにうるうるさせた瞳で悪魔を説得しようと試みる。しかしそんなもの効果があるどころか、かえって魔族のお姉さんを興奮させるだけのようだ。

「もう、なにをいままさらかしまってるのよ。マリーでいいわよ。親しい友達にはそう呼ばれてるの」

かしこまった憶えも親しい友達になった憶えもないが、状況はそれどころではなかった。「ふふふ……魔族のホンキを見せてあげるわ。まずはこれ、淫魔七つ道具のひとつ……」

なにやらゴソゴソしていたローズマリーは、豊満な胸の谷間から小瓶を取り出した。なんだらうか、透明な液体が入っている。



「これすつごく高いのよ？ 十回使えるだけの量で給料一ヶ月分が飛んじゃうんだから」  
きゅぽん、と栓を抜いて指先に雫を落とし、悪魔娘はそれを少年の下半身へ近づける。

「でもね、これを使えば……ふふふ、さぶろーはもうアタシのト・リ・コ。自分から『マ  
リーさん魂を奪って』って言っちゃうわよ、きつと」

ずるん、と脱がされたトランクスから、勢いよくペニスが起き上がった。

「……ごくり」

それをしげしげと見つめてから、ローズマリーは雫の載った指先をそれに触れさせる。  
自分のアソコが、悪魔という以外は綺麗なお姉さんにしか見えない人から触られたこと。  
その初めての体験以上に……。

「う、ううう！ な、なにこれ……！」

それはオナニーにすら罪悪感を感じてしまう優等生な少年が、十数年間生きてきて初めて  
味わう衝撃だった。

「うわあ、すごいすごい、ビクビクし始めたわー」

悪魔娘の言う通り、急角度に持ち上がったペニスが細かく跳ねている。なにもしていな  
いのに、触れられてさえないのに、とんでもない衝撃が下半身を貫いていく。魔族が使  
う高価な媚薬は、これ以上ないほど効果てきめんだった。

「はあ、はあ……ううう……苦しい……」

「んっ……くすぐつたい、です……」

息を荒げている三郎に引きずられたかのように、小桃の吐息もわずかな乱れを見せている。いつもの声とは少し違う、甘えるような声で呟きながら……少女は手を自分の下着にかけると、少しだけそれをずらしていく。

容姿に幼さを残す小桃には似合わない、どことなく淫らな仕草。なのに、控えめに腰を揺らめかせるその姿は三郎の心をどんどん昂<sup>たかぶ</sup>らせていく。

「あう……見ちゃダメなのです……。恥ずかしいのです……」

「でっ、でも……」

ほとんど無毛と言っているソコは、彼女の印象通りに控えめで慎ましかで。まだ硬く閉じ合わされた恥裂は楚<sup>そ</sup>々<sup>そ</sup>としている。

なのにその光景がもたらす影響は、少年のペニスへと如実に表れた。

しゃくり上げるようにして、早く触れてほしいとビクビク跳ねる肉棒。先端から漏れ出るカウパーが、ぷちゅつと音をさせそうなほど勢いよく盛り上がって雫を作る。

「三郎さんの、すぐく苦しそうなのです……。もう少しの我慢なのです……」

下着をずらし終えた指先が、そのすぐ近くにあるペニスへと。わずかに躊躇<sup>ためら</sup>う動きを見せながらも、やがてそつと肉棒に指先が添わせられる。

「んっ……」

触れられただけで、三郎も驚くほどの刺激が走った。

フェラチオまでされてしまったペニスだが、さつきはなにがなにやら分からないうちに、という混乱があった。

だが充分に意識して行われるこの行為は……そんな弱い刺激でさえ数倍にする。

「はあ、んっ……」

揺れる吐息を漏らした小桃。片手をペニスに、片手を自分の恥裂にあてがった指がそれぞれ別の動きを始めた。

ペニスをすりすりすると撫でながらまっすぐ腰に向け、その先にある恥裂を自分で押し開く。  
(うわ、すごい……あんなに綺麗なんだ……)

自分の股間の真上にある、ピンク色の覗く秘裂の内側。生々しいくらいなのに、三郎にはとても綺麗で、そしていやらしく見えた。

ぱくつと割れた裂け目から押し出されるようにして、充血を始めてプリプリした左右のヒダが現れる。陰唇はわずかに濡れ光っていて、少女の羞恥と興奮を示しているようだ。

「このまま……っ、ふ……!! ゾクゾクしますう……」

それが、ゆるりと揺れた腰の動きで亀頭に触れる。二人の粘液が触れ合い、ぬるりとした感触がお互いに敏感なところを濡らしていく。

ぶちゅつと亀頭の触れた場所には、小さな穴が覗いていた。とても亀頭の大きさを呑み

込めるとは思えない、小さすぎるほどのものなのに……。

ぬるっ……ぷぷ。

亀頭が触れて、わずかに押し込まれた途端。密着したままにゆるっと広がっていく。

「うっ……小桃ちゃんの中につ、は、入ってく……」

ほんの数ミリ程度の挿入なのに、ペニスの先からその根元に、それから腰を痺れさせ頭と足の先までをゾクゾクさせる痺れの波が広がる。

三郎はいても立つてもいられず、わずかに腰を動かした。

「ひゃんっ！　だ、だめですう……動いたらっ、んんっ、はあ……ん」

まだほんの先端だけが埋まった亀頭にぐにぐにと膣口を弄り回され、少女が身体を折って少年に覆い被さってくる。かろうじて片手をつけて倒れるのを防いだ小桃だが、乳房にあてがわれた三郎の手がさらにローブを持ち上げ、ぷるっと震える乳肉が表に出てきた。大きすぎず小さすぎずの乳房は形のいい柔肉を少年の顔の前に垂らし、まるで触ってほしいとおねだりしているようで。薄赤の乳首が白い肌に映えて揺れている。

「すごく……綺麗だ……」

喘ぐように呟いた三郎は乳房に口を寄せていた。

「ひゃうっ！　そ、そんなことしたらっ……っはんっ、あっ、ふ……！」

どンドン艶めかしくなっていく少女の声をもっと聞きたくて、少年は乳房の先端にぼつ

んと佇たたずむつぽみを唇に挟んだ。むにむにと転がしては、ちゅつと軽く吸つてみたり、舌で撫で上げてみたり。

「はうううう……！」

泣くのをこらえるような声で小桃が身悶える。挿入を止めてしまう三郎の悪戯めいた行為をたしなめながらも、しかし抵抗する様子はない。

それどころかどんどん息を荒げ細めた目を潤ませる小桃は、自分の胸に吸いついてくる少年の姿を嬉しそうに見つめている。

「んっ、もう……だめですう……。言うことを聞いてくれないと……」

わずかに落ち着いたのか、口ではそう言いながらも少女は再び腰を動かした。

にち……ちゅ、ちゅぶぶ……。

少しずつだが、揺れる腰が少年のそれに近づいていく。先端が抜けてしまいそうになっていた結合部分が、くちゆりと音を立てた。

「あつ、ひゃんんんっ……三郎さんの硬いのが……どんどん、入ってきて……」

「うっ、うん……小桃ちゃんすぐくあつたかい……うあ、ぎゅうぎゅうで……！」

それぞれ違った挿入の感覚に翻弄ほんろうされながら、二人とも、もうその欲求を抑えきれなくなっていた。

——早く繋がりたい。

二人がそれぞれ、わずかに腰を持ち上げ、腰を下ろした動きが重なる。想いが重なった。ずつ……にゆぶぶぶぶつ!

「ふあ、あ……お、奥まで……っんんんっ!」

驚くほどスムーズに進んだ肉棒を、ぬるるつと包み込む粘膜ヒダの連なり。一分の隙もないほどみっちりした膣内が、ぬめる感触と蠢きでペニス全体を呑み込んでいた。

「うっ、く……が、我慢できないっ……!」

三郎が腰をねじるように突き上げる。そもそも死神に処女喪失の痛みはない。が、初めてだという小桃への遠慮は、あまりの快楽でとつくに吹き飛んでいた。

ぐちゅぶぶつ! といやらしい音を立てた膣口がひしゃげ、小桃は大きく背を反り返らせる。ぷるつと弾けた乳房が三郎の口元を離れ、少年の顔面を揉み<sup>なぶ</sup>廻る。

「ひゃううんっ! さ、ぶろさんっ、んっ、はあ、ひゃ、んんんっ!」

しかし、その欲望に忠実な動きは小桃にとつても望ましいモノだったようだ。

「奥につ、ひゃ! んっ、くふ……うんん! ふあ、あつく……あ、当たつて、っは、すごすぎですつ、んっ、ひゃんっ!」

背を反らして髪を散らせては俯いて少年と目を合わせ。恥ずかしそうにしながらもくねくねと腰を揺らす。意外にも貪欲なその動きに、少年の劣情はますます燃え盛る。

「すごいよ、こんなの……っ、気持ちよすぎて……!」

騎乗位の抽送運動は比較的揺れ幅が浅く、その代わりに奥深くを貫いていた。亀頭は子宮壁にコリコリ当たって舌で撫で上げられているよう。ガチガチに硬直した肉莖は吸いついてくるような膣壁の蠢きに締めつけられ、その気持ちよさのあまりつい息を止めてしまふほど。

小桃の方はといえば、身体の奥を抉えぐられることが予想以上の衝撃をもたらすことに戸惑いながらも、しかし三郎とこうしている幸福感も感じていて。

二人の快感の度を示すように、結合部はあつという間に粘液まみれだ。

(あううつ、お腹の中が痺れてますうつ！ こんなに感じて……いやらしい音が……) ぶちゅ、ずる……ずるるつ、ぶちゅうつ！

(んっ、ああんっ、三郎さんにいやらしい女の子だって思われちゃうのにい……っんん！ はあ……ひやううつ、はあ、恥ずかしい声が我慢できないですう！)

きゅつと唇を噛んで、なのに声は抑えきれずに激しく吐息を漏らして、

「さぶろうさあん……っは、ううつ！ はあ、はあ、さぶろうさあんっ！」 鼻にかかる甘えた声で少年の名を呼ぶ。

(小桃ちゃんが、こんな表情をするなんて……)

いつも明るく元気で、ちよつとズレたところはあるもののもかかわいらしい女の子——。今の彼女は、そんな印象とはまるで違う表情をしている。

「もしかして……アタシとじゃイヤ、なの？」

自分の方が背が高くせに、おそらくはわざと上目遣いの位置をキープして。瞳を切なげにうるうるさせながら見上げてくる。

それが分かってているのに……礼儀正しい少年には彼女の問いを無下に肯定できるほどの凶々しさはなかった。

「そ、そんなことは……」

「じゃあ、いいでしょう……？　ねっ、お願い……」

その頃にはすでに、ツボをついた撫で回して少年の股間はギンギンになっている。三郎本人も勃起を意識できないほどの手際のよさだった。

「アタシね、本当はさぶろーのことが好きなの。だけどお仕事だからって、ずっとその気持ちを抑えてきて……。だからもう、我慢したくないな……」

おまけに告白まで。ドキン、と高鳴ってしまった胸の高鳴りはなんなんだろう？

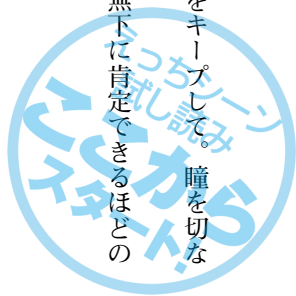
（さ、錯覚だと思いたい……）

自分はそのんなに節操のない人間だったろうか？

（僕は小桃ちゃんのが好き。な……はずなんだけど……）

でも、ローズマリーを前にしてこんなにもドキドキしている。

「うっ、うう……」





トランク스가ストーンと落ち、剥き出しになったペニスに手が添えられる。

と同時、彼女は自らの服に手をかけ、するするとはだけていった。

「ね？ もう、こんなになってる……」

あつという間に大事なところをさらけ出してしまったローズマリーから目が離せない。乳房はこれでもかというくらいに大きくて、マシユマロみたいに柔らかさそうで、乳首はいやらしくピンツと影を作っている。

三郎の手が導かれてその胸肉の中に沈んだ。思った通り、すごく柔らかい。

そしてもう一方の手は……彼女の股間へ誘われている。

くちゅつと湿った感覚と、伸ばした指先が突き止めた、指先にまとわりついてくるような秘壺の中の感触——。

「ほら、こんなになっちゃってるの……」

すうつと離れていくローズマリーのぬくもりに一抹の寂しさを感じてしまったのも束の間、彼女はベッドに腰掛け、自分から股を開く。

ローズマリーが広げてみせる股間は、驚くほどに艶めかしかった。茂みの中にある秘裂は綺麗な色をしたヒダを広げていて内側の粘膜をテラテラ光らせている。かわいらしいくらいなクリトリスはきゅつと盛り上がっておいしそうで、口で吸いつきたくなってしまう。

(アソコに舌を這わせたら、どんな声を出すんだろう……)

ふらりと進んだ足はベッドに向いていた。

もう止められない。それを自覚してまた一步。

ベッドを軋ませ彼女に覆い被さると、つんとしこり立った陰核へと唇を寄せる。

ぶちゅ……ちゅ……。

「ひゃんっ、ん……んんっ……！ さぶろーの舌つて、すぐく気持ちいいわ……」

甘ったるくて脳髓まで痺れるような声に包まれて、三郎はさらに舌を躍らせる。

「あっ、ん……！ や、やつぱり、アタシ、さぶろーが好きみたい。すぐく気持ちよくてっ、こうされてるだけで……ひっ、んんんっ！」

ふるるつと全身に細かい震えを走らせたローズマリーは、それだけの愛撫で軽くイッてしまったようだ。彼女の言葉にウソはないと確信した。確信して、さらに興奮してしまった。

「僕も、もう我慢できない……」

「ああ、嬉しいわ……！ さぶろーがそんなに求めてくれて……」

嬉しそうに目を細めて仰向けになったローズマリーの乳房を、ぎゅつと握り締める。

はあっ、と甘い吐息を漏らして瞳を揺らす彼女の乳首を吸いながら、股間にあてがったペニスで入り口を探る。

ローズマリーも動きを合わせてくれたおかげで、ソコはすぐに見つかった。

ずぶ……にゅぶぶぷつ……。

亀頭はなめらかなストロークによってぬるぬる呑み込まれていく。

「あつ、ん……さぶろーが入ってくるう……つ、やつと繋がれたのね……」

「うっ……これ……すごい」

小桃の中もきゅつと締めつけてくるよさがあるが、こちらはねつとりと吸いついてくるような感じがある。その違いを楽しむ余裕を得た少年は、ぐちゅりとねじ込んで腰を密着させるとすぐに抽送を開始した。

ぶじゅつ！　ちゅ、にちち、ぶぷつ……！！

いやらしい水音はすぐに鳴り始める。二人とも、すぐにでもイッてしまいそうなほど身体を火照らせていた。

「ふああ、く……んんっ！　感じるわ……さぶろーのっ、はあ、は……んっ！　くふう、す、すごく硬い……の」

嬉しそうなローズマリーは、乳房に吸いつく少年の頭をぎゅつと抱きかかえてきて、さらに身体の密着を求める。

三郎もそれに応えて腰を動かし、どんどん性感を高めていく。

「が、我慢しないでいっぱい出してね……何回でも、中に……っんん！　あ、アタシもすぐ、イッチャいそうだからっ……ふああっ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**